

第13回川崎病全国調査およびサーベイランス成績

(分担研究：川崎病のサーベイランスとその解析に関する研究)

柳川 洋、中村好一、屋代真弓

川崎富作*、原田研介**、加藤裕久***

要約：厚生省川崎病研究班は、1970年以来ほぼ2年に1回の間隔で1994年末までに、13回にわたって全国の医療機関を受診した川崎病患者を対象に疫学調査を実施し、これまでに12,8306名(男74,544人、女53,760人、男女比1.4)の患者が報告された。今回1993年1月～1994年12月末までの2年間における第13回全国調査の解析が終了し、その疫学特性を明らかにしたのでその概要を報告する。同時に実施しているサーベイランス事業についてもその妥当性を検討したので報告する。

見出し語：川崎病、全国調査、疫学、サーベイランス

1. 第13回川崎病全国調査成績

【目的】厚生省川崎病研究班は、川崎病の疫学特性および治療状況を明らかにする目的で第13回全国調査を実施した。

【方法】第13回川崎病全国調査は、93年1月1日より94年12月31日の2年間に小児科を併設する100床以上の病院、および小児科のみを標榜する100床未満の専門病院を受診した川崎病初診患者を対象にした。調査は、厚生省健康政策局総務課編「病院要覧1994年版」(医学書院発行)により施設の選定をし、対象施設数は2,640か所であった。

【結果】調査依頼施設のうち、1,730施設から回答が得られ、回収率は65.5%であ

った。そのうち、患者報告があった施設は1,063施設(回収施設の61.4%)であった。今回の調査で報告された患者数は、93年5,389人、94年6,069人のあわせて11,458人であった。患者数は男女とも70年頃から着実に増加する傾向がみられ、過去に3回流行があったが86年以降8年間は、とくに流行はみられていない。今回の調査対象となった93年はやや患者数が減少したが、94年は約10%増加した。(図1)

性別患者数は、男6,729人、女4,729人で、2年間平均の罹患率は両年の推計値による0-4歳人口10万対年間95.1(男108.8、女80.7)であり、3歳未満の者

自治医科大学公衆衛生 :Department of Public Health, Jichi Medical School

*日本川崎病研究センター:Japan Kawasaki Disease Research Center

**日本大学医学部小児科 :Department of Pediatrics, Nihon University School of Medicine

***久留米大学医学部小児科:Department of Pediatrics and Child Health, Kurume University School of Medicine

が全体の70.7% (男71.1%、女70.0%)を占めていた。

93年、94年平均の年齢別罹患率は、男女とも0歳半ばにピークを示す一峰性のカーブを示していた。性比は、月齢が9~11か月の者で最も大きく、1.58であった。(図2)

診断基準への一致度をみると、定型例84.3% (男84.8%、女83.7%)、不定型例4.0% (男4.1%、女3.9%)、容疑例11.6% (男11.1%、女12.4%)であった。

白血球数の分布は、12,000-16,000 (/ μ l)の値で高くなっていた。(図3) CRP値の分布は、5.0-9.9 (mg/dl)の値で高く、容疑例は定型例、不定型例に比べて低値にずれていた。(図4)

同胞例ありの割合は1.2% (男1.1%、女1.2%)であった。再発例の割合は2.9% (男2.9%、女2.9%)であった。再発回数別にみると、再発1回目の者は2.5%、再発2回目以上の者は0.2%であった。再発1回目の者の割合は年齢とともに上昇していた。2回目以上の割合は5歳まで増加していたが、それ以降は増加していなかった。

死亡例は2年間に13例 (男11例、女2例)報告された。男が高率であり、1歳未満が0.2%で1歳以上の1.5倍の高率を示した。

心後遺症例の割合は12.8% (男15.0%、女9.6%)であり、男は女の1.5倍の高率を示し、6か月未満と7歳以上、女は6か月未満と9歳以上が高く、各年齢とも女は男に比べて低かった。巨大瘤、瘤・拡大の出現率は、男および生後6か月未満の患者では、他の年齢よりも高い値を示し、巨大瘤の女以外は、5歳

以上で再び増加傾向を示していた。心後遺症の種類別の割合は、冠動脈の瘤・拡大11.3%、巨大瘤1.0%、弁膜病変0.5%、狭窄0.1%、心筋梗塞0.1%であった。弁膜病変以外は男に高く、特に巨大瘤では、男は女の5倍以上であった。(図5)年齢による差はあまりみられなかったが、巨大瘤の出現率は2歳以上でやや高率にみられ、瘤・拡大の出現率は2歳未満の若年児にやや高率にみられた。後遺症の出現率は、白血球数が高い値ほど高率にみられた。(図6)CRP値でも同様に値が高いほど高率にみられた。(図7)

患者の初診日は第4病日が最も多く、2歳未満の若年児が早く受診していた。診断別に見てもピークは第4病日に集中し、不定型例、容疑例は受診病日がやや早い傾向がみられる一方、10日以上を受診者も多くみられた。

ガンマグロブリンの治療を受けた者は84.1% (男84.7%、女83.3%)を占めていた。男女とも6歳までは約80%を占め、その後下降していた。ガンマグロブリンの1日あたりの投与量は、301-400mg/kgの者が最も多く、次いで101-200mg/kgであった。投与期間は5日が最も多く、次いで3日であった。ガンマグロブリンの1日投与量と使用日数から計算した使用総量は、1000mg/kgが最も多く、次いで200mg/kgであった。(図8)性別にはほとんど差がなく、年齢別にみると、高年齢児、特に10歳以上の使用総量が少なかった。ガンマグロブリン使用総量は白血球数の値の高い者ほど多く、CRP値も同様に数値の高い者ほどやや多くなっていた。ガンマグロブリンの使用の有無別に再発例の割合をみると、使用ありの方が再発例の割合がやや高いが、両方とも同じような年齢

傾向を示していた。ガンマグロブリンの使用の有無別に心後遺症例の割合をみると、使用ありは使用なしに比べて、6か月未満および3歳以上でやや高率の傾向を示していた。ガンマグロブリンの投与開始日は第5病日が最も多く28.7%、次いで第6病日19.5%となっていた。性別にみると、男がやや早く投与する傾向がみられた。ガンマグロブリンの投与開始日を年齢別にみると、2歳未満が早く投与を開始する傾向がみられた。

診断別にみると、定型例が早く投与を開始していた。不定型例、容疑例は10日以上たってから投与開始する者も多く、これは初診時病日の分布と類似している。

【考察とまとめ】2年間の報告患者数は11,458名であり、患者は男女とも冬および夏にやや増加し、秋は少なめであった。罹患率は男女とも0歳半ばにピークを示す一峰性のカーブであった。診断基準への一致度をみると、定型例84.3%、不定型例4.0%、容疑例11.6%であった。同胞例、再発例、心後遺症例の出現頻度は、それぞれ1.2%、2.9%、12.8%であった。死亡例は13人報告され、0.1%を占めていた。心後遺症の内容では、冠状動脈の瘤・拡大11.3%、巨大瘤1.0%、弁膜病変0.5%、狭窄0.1%、心筋梗塞0.1%であった。患者の初診日は第4病日が最も多く、2歳未満の若年児がやや早く受診していた。ガンマグロブリンの治療を受けた者は84.1%を占め、投与開始病日は第5病日が最も多く、1日あたり投与量は400mg/kgおよび400mg/kgの者が多かった。白血球数区分では、12,000-16,000 ($/\mu l$)の値で最も高く、年齢別には、若年齢に高い値の者が

多かった。後遺症の出現率は高い値ほど高率にみられ、ガンマグロブリン使用総量の分布も数値の高い者ほど多かった。CRP値区分では、5.0-9.9 (mg/dl)の値で最も高く、年齢が高くなるにつれて高い値の者が増加していた。後遺症の出現率はCRP値が高いほど高率にみられ、ガンマグロブリン使用総量の分布も数値の高い者ほど多くなっていた。

図1 年次別、性別患者数

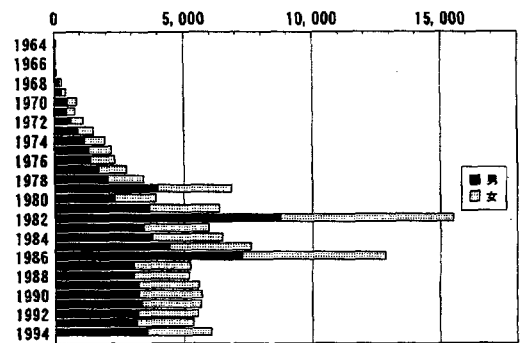


図2 性別、年齢別罹患率
1993年、94年平均

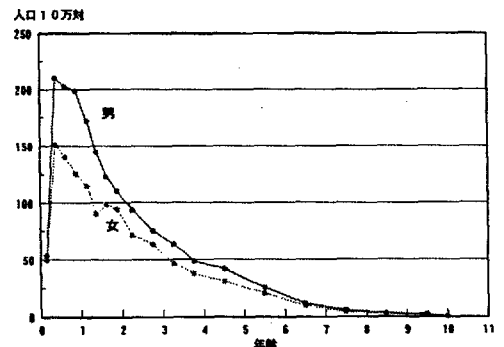


図3 診断別白血球数の分布

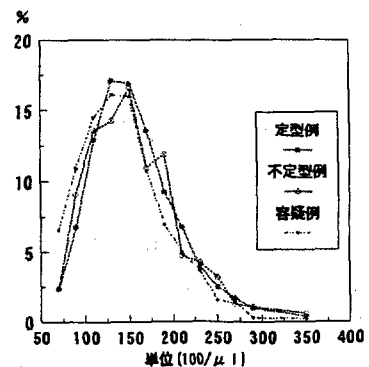


図4 診断別CRP値の分布

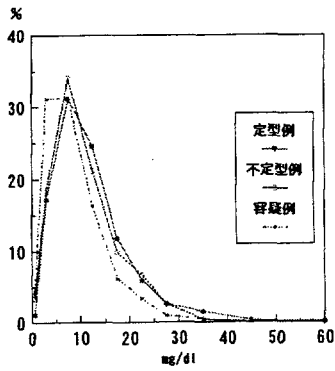


図5 性別、種類別心後遺症の出現率

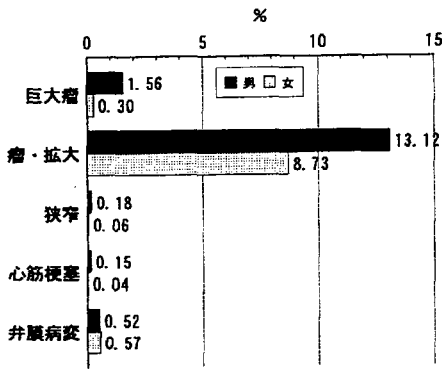


図6 白血球数区分別心後遺症の出現率

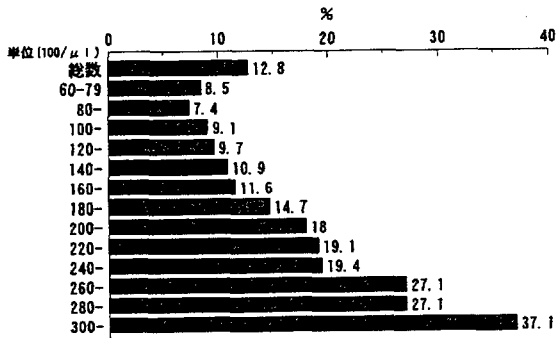


図7 CRP値区分別心後遺症の出現率

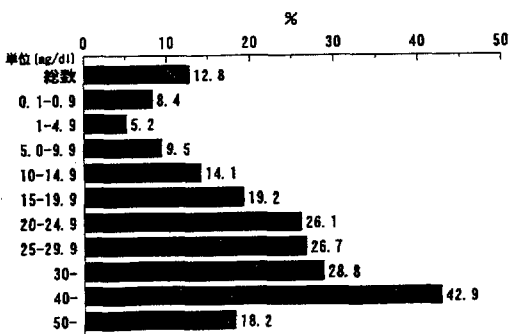
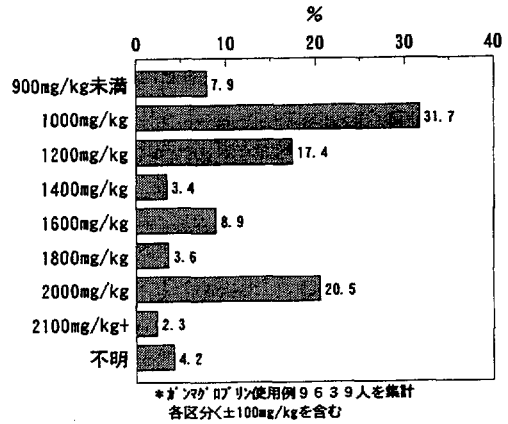


図8 ガンマグロリン使用総量の分布



2. 川崎病サーベイランス成績

【目的】川崎病患者の発生状況を迅速に把握し、タイムリーな情報を医療機関および関係諸機関に還元して、対策の樹立に役立てる目的で過去12年間にわたりサーベイランス事業を実施しているためその妥当性を報告する。

【方法】全国約150ヶ所の病院をモニターステーションとして、毎月受診患者数を性別、年齢別、上中下旬別に報告していただく。

【成績】95年12月までの12年間のサーベイランス成績と同時期の全国調査成績とを比較しその妥当性を評価した結果、以下の成績が得られた。サーベイランス開始後、2回の流行（84年3月からの小さな流行、85年11月中旬からの大きな流行）を経験したが、その後95年12月までの9年半は、患者数の明らかな増加はみられず（図9）、同時期に全国調査で報告された患者も同じような推移を示していた。サーベイランスと全国調査による年次別・月別患者数の増減を月平均患者数に対する比を用いて比較してみると多少のずれはあったものの両者ともよく一致していた。（図10）

5地方別別に流行期前後の推移を観察してみても、流行の大きさおよび流行のはじまりの時期

に多少のずれはあるがよく一致していた。(図11)

【考察とまとめ】95年末で、サーベイランス事業の開始以来12年経過したことになる。最近の9年間は流行がないが、同時期の全国調査と比較しても効率的な情報収集が行われたといえる。以上のことにより、サーベイランスによる患者推移の推定の妥当性が確認された。また、この方法は他疾患にも応用可能であることが示唆された。

図9 サーベイランスによる患者数の推移
年次別、月別、上中下旬別

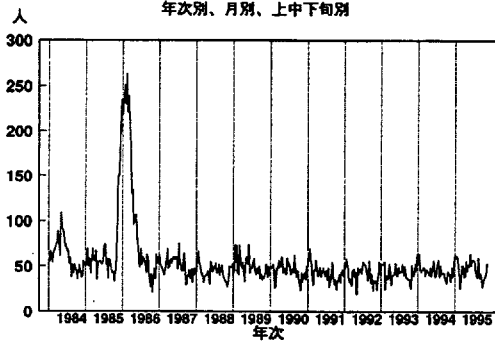


図10 サーベイランスと全国調査による月別患者数の推移

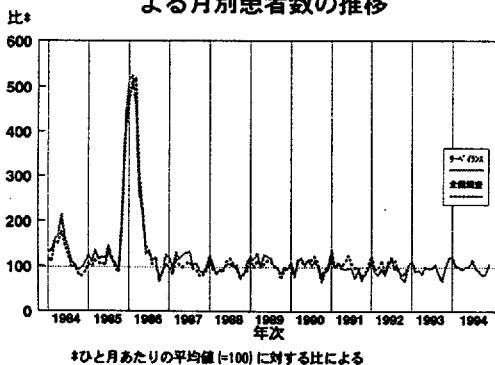
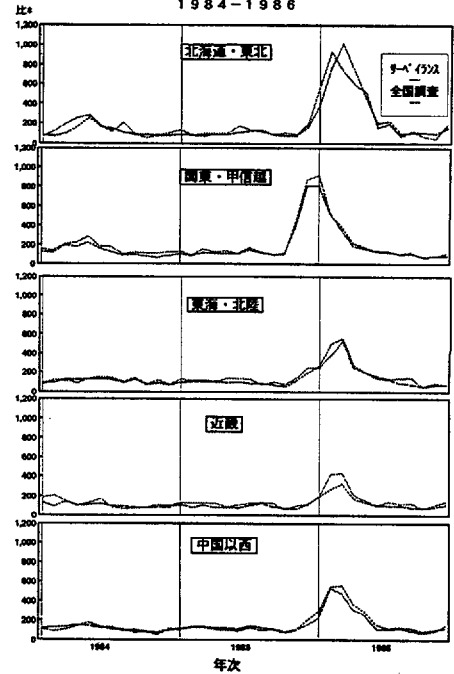


図11 サーベイランスと全国調査による流行期前後の月別、地域別患者数の推移
1984-1986



*ひと月あたりの平均値 (=100) に対する比による

ABSTRACT

Results of the 13th nationwide survey and surveillance of Kawasaki disease

Hiroshi Yanagawa, Yosikazu Nakamura,
Mayumi Yashiro, Tomisaku Kawasaki,
Kensuke Harada, Hirohisa Kato

The number of the patients with Kawasaki disease reported in 1993-94 was 11,458 (males 6,729, females 4,729). The age distribution was mono-modal with a peak around 6 month after birth. The proportion of patients with sibling cases, with recurrence, and with heart sequellae were 1.2%, 2.9% and 12.8%. The proportion of patients treated with IVGG was 84.1%.

High validity of the surveillance system for timely estimation of the changes in the incidence of Kawasaki disease was confirmed.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:厚生省川崎病研究班は、1970年以来ほぼ2年に1回の間隔で1994年末までに、13回にわたって全国の医療機関を受診した川崎病患者を対象に疫学調査を実施し、これまでに12,8306名(男74,544人、女53,760人、男女比1.4)の患者が報告された。今回1993年1月～1994年12月末までの2年間における第13回全国調査の解析が終了し、その疫学特性を明らかにしたのでその概要を報告する。同時に実施しているサーベイランス事業についてもその妥当性を検討したので報告する。